

おかげさまで

● 本気でした

小っちゃなうれしさを
積み重ねて15年…。
あなたに会えて本当によかった。

夕やけの中に
感謝を込めて



今までの感謝を込め、こんなキヤッチ
コピィを掲げて来館者をお迎えした、第
15回全国「かまぼこ板の絵」展覧会。節目
の年だった。決して短くはないけど、長か
ったとも思わないかまぼ
こ板の絵との15年。あり
がたいことに「長いこと
続きますねえ」とか、「よ
く頑張られましたなあ」と
か、労いの言葉もたく
さんいただいた。

思い出してみれば、こ
の企画を思いつき、進行
形になって、本気で一心
不乱に格闘した日々が愛
おしく、懐かしい。何に

も無いところから始めたので、全てがお
初。一つひとつ、前に進む道を切り開いて
いかなければならなかった。頭も使った
し、体も動かした。批判も受けたし、イジ
メられもした。

「前例がないという壁がこんなに厚く高
いとほ…」と苦しみ、泣きもした。そんな
中、とにかくやらなければならぬこと
を粉にして飲んだような気がする。だか
らなのか、他人がびつくりするほどいろ
んなことを覚えている。

● ヤメどきだ！

感動のエピソードが話題になったり、
全国版の受賞が続いたり第3回展まで
は無事終了。第4回展は子どもたちが大
活躍。優秀賞10点中、7点がジュニアとい
う快挙。審査員も私達スタッフも「未来は
明るい」なんて言いながら大喜びしたが、
入館者は激減。「金を払って見るような絵
じゃない」と非難さえ受けた。子どもたち

第14回展応募作品
「夢作り人」
作者/沼田博美(75歳)
(新居浜市)



ギャラリーしろかわ
館長
浅野 幸江



「すごい！見て！見て！」

の元気が大人の「本音と建前」の前でタジ
タジだったような気がする。
これが引き金、右肩上がりでなくなっ
た途端、トップから申し渡されたのが「今
がヤメどきだ」という厳しい言葉だった。
会議でも取りつく島がない状態。この頃

のことは今、思い出しても背筋が寒い。

とにかく、何があっても「感動の花を咲かせたい」と思った。その頃のメモには「根っこは夢、茎は意地。『前例が無い』という葉っぱをいっぱいつけて、チームワークを栄養に『かまぼこ板の花』を咲かせたい。小さな種はタンポポ綿毛。みんなのもとへ届けます」と書いている。

「揚げ足取り太郎」対策という秘策も練った。とにかく、ブレないことだと思おう。アイディアの足し算をし、それを手間ひまかけてアレンジ。そんな私たちを応援し、外堀を埋めてもらったのがメディアのみなさんだった。山の中の小さな美術館を育てていただいたのだ。

● 汗は裏切らない

ある時「あなたはこの仕事が好きなんだよ。いや、好きというより愛しているんだろ。責任感だけでは、ここまでやれんよ」と審査員長の富永一朗先生に言われた。確かに忙しかった。風呂で溺れるほど疲れていたけど、真剣だった毎日が充実し、楽しくて幸せだったんだと気づいた。



阪神大震災の被災者との交流も15年

おかげで「夢は汗かき」なんだということも知った。無我夢中になれるものに出会えたことに、感謝しなければならぬだろう。

● ふるさと母のまじり

「絵はいつでも、だれでも、何にでも描ける。かまぼこ板の上にあなたの人生を乗せて、捨てられる木片に命の灯をともしてください」と訴えた私たち。それに応えてくださった50万人を超えるみなさんの思いが、かまぼこ板に第2の人生を与えてもらったのだ。私たちはその思いを大事にし、ふるさとの母ちゃんのような気持ちで作品と向き合ってきた。

● 必ず続きを作ること

母のような思いが、ひよんなことから続きを生んだ。福井県坂井市の「一筆啓上賞」日本一短い手紙とのコラボである。「短い」手紙と「小さい」キャンペーンで「世界一大きな感動物語を」というコンセプトが面白がられ、大きく報道された。その結果、福井県の名勝として有名な東尋坊には、自殺防止のためにこのコラボ作品が陶板で設置され話題になっている。また、愛媛県内ではこれらの作品が1週1



入賞作品に歓声が

作品、1年間に52作品がCMとして放映されている。来年度からはあるテレビ局が主催になって、全国各地でコラボ作品展を開催していただくとのこと。かまぼこ板第2の人生物語は夢いっぱいである。

そんな今、しみじみ思う。「絵はこころの手紙だった」と。「板の数だけ夢があった」と。一生懸命だった毎日が、自信に繋がった思い出はじんわりとやさしい。さて、今からどんな風に頑張ればこの展覧会が成長していけるのか、四股もすっかり踏まなければならぬ。とにかく、何があっても、仕事は集中、熱中、夢中になって、人生を輝かせるものでなければいけないと思う。

ありがとう。
あなたに出会ったこと忘れない。